

# 保育の体験と思索

——子どもの世界の探究——(二)

津 守 真

五月十日

動くもの

子どものしていることには、ごくあたりまえのことなので、その意味を問うこともなく通り過ぎてしまうことが多くある。保育の実践としては、それでよいのだけれども、ときに、それは子どもにとってどういう意味をもつものであるのか、問い直してみることもある。この日のTのしていることがそうであった。

朝、私が部屋にゆくと、Tはひとりで床の上に座って、くみききをしている。私は、Tは何が面白くてくみききをしているのかと思いい、傍に座って、同じようにくみききをつなげた。さいわい、室内には、他にほとんどだれもいないので、Tと会話をかわしながら、それぞれ、くみききをつなげていた。Tは、横につなげ、また、たてにつなげて長くしてゆく。ある程度つなげると床におき、少

し動かすとあちこちはずれるので、またつなげる。ジャンボジェットだというので、飛行機をつくろうとしていることはわかる。これをくりかえし、長い時間、忍耐つよく（と私には思えた）つづける。私は、傍にいて、同じようにくみききをつなげ、床において、動かすとはずれるのをまたつなげていたが、こんなに長い時間、Tがくみききするのはどういうことであるのか、わからないまま、Tが庭に出たので、私も庭に出た。このことが、いくらか分かったのは次の日であった。

翌朝、私が庭にいと、Tがブロックを長くつなげたのを腕にかかえて、庭の向こうから走ってきた。ブロックのジェット機は、Tにかかえられて庭中走りまわっていた。これを見て気が付かされたことは、Tは動かすことのできる飛行機をブロックで作りとうとしていたのではなかったかということである。

さらにその翌日、私は愛育の子どもについて、類似の観察をし

た。Sは、長い間、母親から離れないで、母親が保育室にはいついた子どもであるが、その終りころになって、電池で動く汽車を、丸くつなげた線路の上を動かして、眺めるのを好んでいた。床に顔をすりつけるようにして、汽車が動くのを見て、手を叩いたり、足踏みをしたりして喜んだ。この日、Sは、線路の上を汽車を走らせながら、その場を立ち去って、室内の滑り台をしているので、私は汽車の電池を止めた。すると、Sはすぐに汽車にもどり、電池のスイッチをいれて動かし、また滑り台をする。何度止めても、すぐにもどってくる。他のことをしながらも、汽車が動いていることがこの子どもにとっては必要なことであるらしい。その日の午後、私が砂場に出ていると、Sはその汽車を砂場にもってきて、どろんこの砂の中に放り投げて、部屋の中に入った。私はだまって見ている、そのままにしておいた。Sにとっては、この行為は何か意味があるように思えたのである。電池の汽車は、砂の中で車輪を空回りさせていた。しばらくして、Sは、砂場に来て、その汽車を拾い上げ、室内にもってきて、線路の外を走らせた。それまで、線路の軌道の上だけを走らせていた子どもが、軌道の外を走らせるのには、その汽車を一度、砂の中に捨てなければならなかったのだと思う。砂場の中の泥んこは、形なく、混沌の場所である。その中に汽車を投げこんだとき、はじめ

て、いつもきまった軌道を破って、広い空間に汽車を走らせることができた。

子どもが遊んでいる一つの物は、外から観察するならば、子どもの身体の外に外在する物である。しかし、ある物を使っている本人にとっては、それは単なる外の物ではなくて、自分が愛着をもっており、それがなくてはいられないようなものである。つまり、ひとつの物は、外在する物でありながら、人にとっては、自分と切り離せない内的性質をもっている。Sにとって、汽車は、自分自身とも言えそうで、いままで母親から離れられず、保育室の中を自由に動きまわれなかったSの心の中に、動きが生まれるときに、その心の動きは、汽車によって外在化されたと言つてよいであろう。この子どもにとって、その汽車を泥んこの混沌の中に投げこむのは、それなりの思い切りが必要だったろうとも思う。この日、Sは、いままでやらなかったいろいろのことを試みた。砂場に水を運び、三輪車にのり、戸外の高い滑り台の上で遊ぶなど、動きが大きくなったことは顕著であった。

Tの場合も、Sの場合も、心の中に生じた動きが、動く乗物に對する関心となってあらわれたと言つてよいように思う。Tは入園して間もないころ、これから幼稚園の中で何かをやるという

気持ちが生じたときのことであった。この時期を通り過ぎて、さまざまなことをして活発に遊ぶようになったとき、Tの乗物に対する関心は特別に見られなくなっていた。

ある時期の子どもは、乗物に非常に関心を示すことは、今まで気がついていなかったことであるが、それが、心に動きを生じたときにあらわれる現象として考えると、さらに発見することが出てくるのではないかと思う。ただし、乗物に対する関心が常に心の動きに対応すると考えたら、機械的公式論に陥る。一例、一例について、新たに考えてゆくことである。

#### 大人の世界と子どもの世界

五月十日の日、帰るまぎわに、みんなほとんど椅子に座っていると、女兒M<sub>a</sub>が私のところに来て、「カミ」という。私は、何の紙がほしいのかと思ひ、スコッティの箱のちり紙をとってやると、「チガウカミ」という。何かがほしいのだろうと思ひ、M<sub>a</sub>の視線のいつているあたりの棚の箱をおろすと、中に赤や青のきれいな色刷りの木馬座の広告が入っている。それがM<sub>a</sub>の欲していたものかどうかたしかではないが、M<sub>a</sub>はそれを一枚とって満足な様子である。すると傍にいた男の子が、二、三人手を出して欲しいるので、これでは皆が欲しくなるのではないかと私は一瞬心配に

なるが、私は、その子どもたちに与えた。そうすると、M<sub>a</sub>は、私に「ハサミ」という。M<sub>a</sub>が何をしたいのかよく分からないが、何かをしたいらしく、こちらで察することとは別のところに、何か意図があるらしい。もうすでに、大部分の子どもたちは椅子に座り、M<sub>a</sub>を待っているのです、私はいそいそではさみでまわりを切り抜いて、手を引いて椅子につれていった。この時は、私がM<sub>a</sub>との間でこれだけのことをすることを、担任の先生が何も言わないでゆるしてくれたし、M<sub>a</sub>もこれで大体満足し、帰る方向に動いてくれたので、これですんだ。しかし、かならずしも、いつもうまくいくとは限らない。一人の子どもにきれいな紙を渡せば、他の子どももほしくなるだろうし、こういうとき、私はいつも当惑する。そして、こういうことは、いままでにも何回となくあった。これをその子どもがままときめてしまつて、集団の中でわがままは許されないという風に考えてしまったら、あまりにも幼い子どもの実情とかげはなれた処置になってしまう。こういうことは、三歳の子どもには、普通に起こることであつて、集団生活だからと言って、こういうことが全く起こらない集団だったら、三歳児の生活としては、どこかに無理が生じているのだろうと思う。おとなとしてどのようにしたらよいかは、そのときどきによって異なるであろうが、おとなが考えるのとは全く違った観点からの見

方が子どもにはあるということを前提とし、それを包容するゆとりのある生活が子どもには必要であると思う。

三歳児の家庭生活の中には、これに類似した場面は、幼稚園よりもっと多いように思う。そのような事例は数多いが、一例だけ引用する。

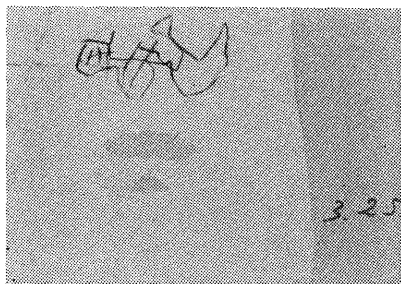
### 三月二十五日

三歳四か月のYは、「ウサギつくって」と何度もいうので、私は広告のはしで、うさぎの形を切ってやるが、「それじゃーだめー」という。どうしたらいいかと思い、私はいろいろの形に切ってみるが、Yはどうしてもだめだという。こんなにしてやっても気に入らないとは、勝手過ぎるではないかという気にとりつかれながら、私は、「うさぎ」という私の観念をすてて、「どうやって作ろうか」と子どもにたずねた。そうすると直ちに、「半分折って」「また折って」というので、その通りにする。「メ、切って」「メ、切って」というので、目のように切る。紙を広げると穴が空いている。Yは「見える、見える」と言っよるこぶ。Yは、こんどは自分で別の広告を折り、はさみで切っよる穴をあけ、私に、目と鼻を出させてよるこぶ。(写真参照)「ウサギつくって」というので、私は、耳の長いうさぎの形を思い浮かべたのであるが、

Yにとっては、こういう目や鼻の穴のあいたものだったのである。(Yは、この前後、おめんを作ったり、作らせたりすることが多かった)子どもにたずねて、こういう単純なものを作っよるも満足したし、私も自分の考えが一步ひろがっよるように思っよる。子どもの心の中にあるものが何であるかが分からず、おとなの考えで強引に押切らなかつよるために、子どももおとなも満足することは日常生活のいろいろなところで経験する。

M<sub>a</sub>の事例を考えてみても、帰る間際のだから、無理にでも座らせて帰すことは、むしろ簡単なことである。しかし、こういう時にも、子どもの世界をあらわに示す三歳児は、実に子どもらしくていいものだと思っよる。あまりに整然と集団行動をすることができのを見るに、三歳児の世界はどこにいつてしまつたのかと思っよる。

(つづく)



▲穴をあけただけのうさぎ